



泗水町 有田 町長

基盤整備事業の現場で

真白に雪化粧した鞍岳の見える菊池台地の畑の真中に立ちました。ここ七城町十三部地区では県営圃場整備事業が着々と進行しています。数年前までは高低段差が激しく、狭い田畑が入り組んだところでしたが、三年前から始まったこの事業で、今は広々とした長方形の畑が碁盤目に並び農地が変わり、農道や用排水路がその地区を整然と走っています。やがて大型機械が導入され、稲作はもちろん畑にはたばこや牧草、そして、メロンなどのハウス園芸作物

明日の農業を育てる。

農村総合整備モデル事業

が大規模に栽培されることでしょう。県耕地課の方の話によると、さらに将来「竜門ダム」が完成したら、この菊池台地にパイプで水を引き、どんなかんばつにも耐えられる豊かな農用地を作りたいということでした。このように基盤整備事業は農業県熊本にとって非常に重要な部分を占めています。

県農政における 基盤整備事業

予算面から県の農政を見ると、昭和

五十八年度は農政関係分として約五百七十一億円が計上されていますが、このうち実に五三％にあたる約三百億円が基盤整備事業にあてられています。この予算により事業を施行している地区は国営・県営事業として約二百十地区、さらに団体営事業を合わせると四百十地区を超えています。しかも、一地区について三年から十年の歳月を費やして事業が完成するということですから、その力の入れようがうかがえます。

戦後の食糧難時代には、食糧の増産を第一に事業が行われてきましたが、社会情勢の変化に伴ってその目的も変わり、農家の生活環境改善などいろいろな面を考慮した総合的な事業へと移行してきました。

昭和四十年代後半には、農村総合整備モデル事業の名称のもとに、生活に密着した事業が進められるようになりました。

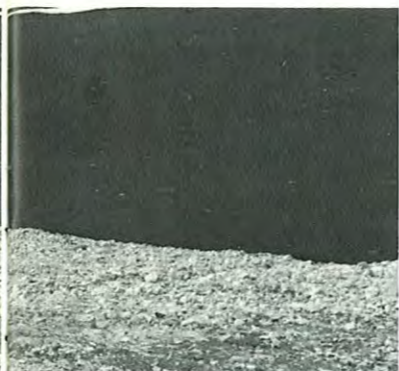
農村総合整備モデル事業、十年の姿

菊池郡泗水町は全国に先がけて、昭和三十八年から町ぐるみで農業構造改善事業に取り組み、成果をあげています。今では、全国各地から視察訪問客が絶えないということで、私もさっそく訪ねてみました。

昭和三十年代後半から高度経済成長のあおりを受けて、急速に過疎が進んだ町では、危機感を抱き、いち早く農業の近代化と農村の生活向上

ポ ル 政 県

の の さ ま マ マ



七城町の現地で

を目指し、基盤整備事業に取り組みました。そして、昭和四十九年には、農村総合整備モデル事業が採択されました。

当初、七年計画、八億円余の予算でスタートしましたが、関係者の熱意と農家の意識の向上や要望もあって、最終的には十年、約十七億円という大事業となりました。

町長さんの話では、この事業の結果、農業経営の規模が拡大し機械化が進み、畜産、養蚕、たばこ、野菜園芸などの農業経営が向上し、他産業にひけを取らないものになったということです。

また、都市生活と変わらない豊かな暮らしを目指して、各集落に通じる道路が拡張、舗装され、下水、排水路も整備されているのが町内の随所に見受けられました。

町の中心部には公民館に代わる農村環境改善センターが建てられました。このセンターには結婚式場を兼ねた大研修室や図書室、視聴覚室、調理実習室などが設けられ、住民の活気に満ちた活動の場として利用されていました。町内の各所に作られた農村公園も町民のソフトボールやゲートボールに利用され、健康づくりとコミュニケーションの場として機能を発揮しているようです。まさにこの事業が町づくりから人づくりまで大きく寄与していることを強く感じました。

地元のエネルギーで 農村の近代化を 基盤整備事業の生産力強化という面だけでなく、集落の道路や下水道の整備、公共施設の充実も含めた事業は、流通問題改善や、一・五次産業づくりといった今後の農業へと夢をふくらませてくれます。

県内の主要道路を通る限り、見渡すかぎり基盤整備が進んでいるようですが、実際には山間部の基盤整備はまだ全体の三割程度だということです。そこには農家の人たちの基盤整備への意欲とそれに応える当局の取り組みが何よりも大切でしょう。

地元のエネルギーで農業の近代化を図り、地方の特色ある農業経営を進める姿勢が山積する農業の諸問題の解決に結びつくのではないでしょう



農村公園でお年寄り